



紀行文学における事実と真実：吉田健一「或る田舎町の魅力」をめぐって

著者	島内 裕子
雑誌名	放送大学研究年報
巻	17
ページ	210(29)-188(51)
発行年	2000-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1146/00007413/

紀行文学における事実と真実

—— 吉田健一「或る田舎町の魅力」をめぐる ——

*1)

島 内 裕 子

要 旨

本稿は、紀行文学における事実と真実を考察するにあたって、具体例として吉田健一の「或る田舎町の魅力」を取り上げるものである。「或る田舎町の魅力」は、昭和二十九年八月号の雑誌『旅』に掲載された短い作品で、埼玉県児玉町の訪問記である。その後、『隨筆 酒に呑まれた頭』（昭和三十年刊）や『日本に就いて』（昭和三十二年刊）などの吉田健一の単行本に所収されただけでなく、昭和三十年代から四十年代に刊行された各種の文学全集にも、吉田健一の収録作品として繰り返し再録された。昭和五十年代以後に編まれた各種のアンソロジーにも、この作品が選ばれている。また、文学者たちのエッセイなどでも言及されたり、かなり詳しく論じられている。このように、「或る田舎町の魅力」は短編ではあるが、吉田健一の代表作の一つと言える。

本稿では考察の順序として、「或る田舎町の魅力」の文学史的な定位を図るために、まずこの作品の再録状況を概観し、次に他の文学者たちの論評を検討する。それらの作業を踏まえた上で、「或る田舎町の魅力」の内容を再確認する。吉田健一の児玉訪問から現在まで、すでに五十年近い歳月が経過しているので、現地調査にはかなりの困難を伴ったが、幸い当時のことを記憶している人々から貴重な回想談を聞くことが出来た。そればかりか、児玉ゆかりの人々の尽力によって、作品を読んだだけでは思いもよらぬ、さまざまな新事実を発掘することもできた。

この作品には、吉田健一が児玉町を再訪した時のことが主として書かれているが、最初の児玉訪問がいつであったのか、その年月日を特定できた。当時の児玉の文学環境も浮かび上がり、「或る田舎町の魅力」誕生の直接の契機と、その背景が明らかになった。さらに、吉田健一の児玉再訪が、彼単独のものではなかったことも判明した。そのことは、吉田健一の文学的交友を考える上でも重要であるし、そのような緊密な交友がやがては同人雑誌『聲』発刊へと繋がっていったのである。「或る田舎町の魅力」を文学史の流れの中で位置付けるとともに、事実と真実がどのように織り込まれてすぐれた紀行文学となりうるのかを解明し、この作品の文学的な達成を考察したい。

はじめに

『徒然草』の中で兼好が、「いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ、目さむる心地すれ」(第十五段)と書いているように、人は旅に出ると日常生活では感じられないような感興を覚える。ただし、『徒然草』においてこそ旅というものがこのように捉えられているが、実際に文学作品で描かれた旅は、古典文学の場合、かなり類型化している。たとえば羈旅歌は勅撰集の部立になっているが、中世までは旅の歌といえ、故郷の人々との別れを伴う辛く悲しいものとして自覚され、旅先での慣れぬ野宿のわびしさや心細さ、故郷に残してきた親しい人々への懐かしさや再会への危惧が中心テーマとして詠まれてきた。旅の楽しさや見知らぬ土地を訪ねた新鮮な感動が詠まれることはほとんどない。

一方、鎌倉に幕府が開設されて以来、京都と鎌倉の往還が盛んになったことから、『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』のような鎌倉下向を目指す東海道の旅が散文作品で描かれるようになった。南北朝・室町時代以後は、歌人・連歌師・武将たちによって、さらに全国各地への旅が描かれている。南北朝時代の歌人宗久による『都のつと』は、芭蕉の『奥の細道』を思わせるような塩釜・松島への旅を含む大旅行である。宗祇の『白

河紀行』や『筑紫道記』、今川了俊の『道行きぶり』や細川幽斎の『九州道の記』などには、戦乱の時代の影が差しているが、内容の中心は各地の歌枕探訪である。中世の時代に盛んになったこれらの紀行文学において、古典文学の舞台や歴史上の事件が起こった土地を直接訪ねた感慨が書かれているが、表現自体は『伊勢物語』『源氏物語』などや著名な和歌を引用しながら書き進められることが多い。

古典における紀行文学は、実際の旅の体験が、必ずといってよいほどそれ以前の著名な和歌や散文の世界と重層している。そして旅を描くということが単に行程の記録ではなく、古典的な表現の引用などによって書かれ、作品としての執筆が意図される時、おそらくどの紀行文学であってもその一部は、実際に行った旅とは異なる部分があるであろう。昭和の時代になって『曾良旅日記』が紹介され、それによって『奥の細道』の記述の創作性が明らかになり、驚きをもって迎えられた時、最も明瞭になったのは、芭蕉の創作力であるよりもむしろ、無意識のうちに現代人が自明のこととしてきた事実重視の姿勢であり、それが現代人の文学観に浸透していたことであろう。

旅という実際の体験に基づく紀行文学において、事実と真実とは何であるか。説話の世界においては、平安時代の能因が、実は旅になど出ずに都の自分の庵の窓から首を出して日に灼け、いかにも遠く旅立ってきたかのようにして、「都をば霞と

ともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」と詠んだという伝承さえある。旅の文学における虚構性とは何か。虚構によってこそ伝えうる真実とは何か。このことについて、現代の紀行文学からどのようなことが考察できるのか、吉田健一の「或る田舎町の魅力」をめぐって、考えてみたい。

一 「或る田舎町の魅力」の初出と再録状況

1 初出誌

吉田健一の「或る田舎町の魅力」は、昭和二十九年八月号の雑誌『旅』（第二十八巻・第八号）に掲載された紀行文である。一行二十二字・二十九行・三段組でちょうど三ページである。初出ではタイトルが「ある田舎町の魅力」と表記され、「児玉」というところ」という副題がついている。また、この初出では新字・新仮名であり、ルビもかなり付いているが、ルビは再録時にはほとんど削除されている。冒頭に、八高線折原駅の写真が一葉と関連地図が掲げられている。この地図は東は鴻巣・境、西は鬼石・氷川、南は八王子・浅川、北は本庄・児玉を囲む地域の略図であり、八高線を中央に、鉄道の路線や主な駅が書き入れているので、記事を読むのに便利である。また、内容に応じて「名所旧蹟のない町」「八高線にひかれて」「町よし酒よし」という小見出しがついており、末尾に（文芸評論家）と

ある。写真・地図・小見出しなどは掲載誌の編集部でつけたものであろうから、後にこの作品が吉田健一の著作に入った時には当然省略されている。副題については、吉田健一自身がつけた可能性もあるが、再録の際に副題はなくなっている。

雑誌『旅』は、財団法人日本交通公社発行の月刊誌で、吉田健一はこの雑誌に、昭和二十六年頃から昭和三十一年頃までは毎年一、二回寄稿している。それらのほとんどは後に単行本に収められたが、昭和三十一年三月号の「姫路から博多まで」や昭和三十五年一月号の「新潟で雑煮を祝ってみたい」、同二月号の「『ねぎま』と『あんこう鍋』」、同三月号の「味噌漬には熱いご飯が合う」など、単行本未収録のものもある。

『旅』掲載作品の中で、昭和三十年七月号に「羽越路二人三脚」のタイトルで河上徹太郎とともに執筆した新潟から酒田への旅は、後に「羽越瓶子行」の題で単行本に収められており、これも「或る田舎町の魅力」と通じる紀行文学と見做すことができる。

2 吉田健一の著作への再録

次に、「或る田舎町の魅力」が吉田健一の著作の中にどのように再録されているか見てみよう。その際に、この作品を読んだ人々による言及も併せて示し、「或る田舎町の魅力」の流布状況を概観したい。

①『隨筆 酒に呑まれた頭』(昭和三十年八月刊、新潮社)

「或る田舎町の魅力」を含めて十七編のエッセイや小説などが収められている。収録作品の細目については、『吉田健一著作集』(集英社)の第二巻解題に掲げられているので省略するが、この本は後に解体されて、「国籍がない大使の話」「酒宴」などの短編小説は『酒宴』に、「飲み食いの思い出」「饗宴」の二編は『舌鼓とところどころ』に、「昔の思い出」「母に就いて」などは『三文紳士』に、「お芽出たい幻想」「屠蘇が飲めるまで」などは『作法無作法』にというように、内容ことに異なる単行本に再録されている。「或る田舎町の魅力」は「女と社交について」とともに、次項の『日本について』に再録された。なお、雑誌『あるびよん』昭和三十年十一月号の「一頁インタビュー」では、「更に最近のヒット隨筆集としては『酒に呑まれた頭』がある」と紹介されている¹⁾。

②『日本について』(昭和三十二年八月刊、講談社)

この本は、昭和二十年代の半ば頃から昭和三十二年五月までに、主として各種の雑誌に発表した作品をまとめたものである。「或る田舎町の魅力」を含めて十二編が収められている。本書の内容については、吉田健一自身「後記」で次のように述べている。

今まで書いたものの中から日本のことを扱ったものを集めて見たのが、この本である。それが目安になったので、

形式は批評、隨筆、又その何れとも付かないものといふ風に区々であるが、題材で統一してあれば、それでも構はないのではないかと思ふ。又、この標準に従ったので、中には既に他の本に入れたものも、雑誌に出なかつたものもあつて、その点でも一定してゐない。要するに、これは日本に就て書いた本なのである。

日本について書いたものをまとめたと明記しているところから、「或る田舎町の魅力」もただ単に児玉の魅力を書いた紀行文ではなく、もっと大局的な視点をこの作品に込めたという意識があるのであろう。また、作品のジャンルも「批評、隨筆、又その何れとも付かないもの」と述べているのは、彼のジャンル意識があらわれた言葉として注目される。このことに関連するが、この本が第四回新潮文学賞を受賞した際の「選後評」には、吉田健一に対する当時の文学的な評価が反映している。河上徹太郎は「これは隨筆の形で綴られた評論」であると評し、小林秀雄は「エッセイとして今日まで見られなかつた独特な文体を創り出した」と評している。

③『吉田健一著作集』第七卷(昭和三十六年九月刊、垂水書房)

前項の単行本『日本について』および『ひまつぶし』の二冊を収める。「著作集付記」として、次のようにある。

「日本について」と「ひまつぶし」は何れも講談社から

出た。その「ひまつぶし」の後記にある通り、これは「続日本について」といふ題を付ける積りでめた位で、二つを一冊に纏めてもいいかと考へ、さういふ場合には最初に出た方の本の発行年月で順序を決めるこの著作集の方針に従つて、これを第七巻とした。

なお、後述する種村季弘のエッセイには、「或る田舎町の魅力」をこの垂水書房版『吉田健一著作集』で読んだとある。

④『吉田健一全集』第四巻（昭和四十三年三月刊、原書房）この原書房版『吉田健一全集』は未見であるが、『吉田健一集成』別巻（一九九四年六月刊、新潮社）の「吉田健一年譜」によれば、この第四巻には『日本について』『ひまつぶし』『書き捨てた言葉Ⅱ』の三冊が収められている。後述する篠田一士の評論はこの全集に付けられた解題である。

⑤『日本に就て』（昭和四十九年十一月刊、筑摩書房）

この本は、②の『日本について』所収十二編の中から、「チャーチルと文学」「英国の景色」「牧野伸顕」の三編を除いた九編に、『不信心』（昭和三十七年九月刊、朝日新聞社）収録の評論などを中心に再編成したものである。「或る田舎町の魅力」を含む二十三編が収められている。旧版では『日本について』と表記されていたが、新版では『日本に就て』となった。

⑥『新編 酒に呑まれた頭』（昭和五十年九月刊、番町書房）この本は、①と書名が類似しているが、収録作品は大幅に異

なる。ここに収められているのは、「或る田舎町の魅力」を含む五十四編であるが、その収録数からも推察できるように、短いエッセイが多い。主として食べ物や旅や酒に関するものが集められている。ただし、この編成が吉田健一自身によって行われたのか、あるいは出版社の方で編集したのか、後記のようなものも何も付いていないので刊行事情は不明である。本に付けられた帯には横書で一行目に「酒 肴 旅」とやや大きく印刷されている。二行目以下には、「遊行する感覚、不思議な文体、良質のチーズの味——誰よりも酒を愛し、美味探求に情熱を傾けつくすボン・サンスの人、吉田氏のユーモアとウィットに富む魅力あふれるエッセイ集！」とあり、「ユーモアエッセイ集」と銘打っている。

⑦『日本のよさ』（昭和五十二年十月刊、ゆまにて）

『ひまつぶし』（昭和三十四年十一月刊、講談社）『文句の言ひどほし』（昭和三十六年三月刊、朝日新聞社）『書き捨てた言葉』（昭和三十七年五月刊、垂水書房）『不信心』などから主として日本に関するエッセイを集めたもので、「或る田舎町の魅力」を含む五十編を収録する。⑤の筑摩書房版『日本に就て』と重複する作品は、「或る田舎町の魅力」「日本管見」「日本語に就て」の三編である。

⑧『吉田健一著作集』第四巻（昭和五十三年二月刊、集英社）

この本には、『日本に就て』と『甘酸っぱい味』の二冊を収める。「或る田舎町の魅力」を収めている『日本に就て』の底本は、③の垂水書房版『吉田健一著作集』第七巻である。

⑨『吉田健一集成 第四巻・批評IV』（平成五年十二月刊、新潮社）

この本は、解題によれば、清水徹の編集により、『吉田健一集成』の他の巻に収められていない作品を選んだとある。外国文学や日本の近代文学、文化論などに関する比較的短い評論二十六編を収める。「或る田舎町の魅力」は、二十五番目に位置している。

⑩『新編 酒に吞まれた頭』（平成七年七月刊、筑摩文庫）

この本は、①の『随筆 酒に吞まれた頭』および⑥の『新編 酒に吞まれた頭』と、書名が類似または同一であるが、内容は新編集であり「或る田舎町の魅力」を含む二十六編が収められている。清水徹の解説には本書の編集方針として、「この『新編 酒に吞まれた頭』は、初版『随筆 酒に吞まれた頭』から『三文紳士』に収録されたものなど十篇を削り、そのかわり『宰相御曹司貧窮す』Ⅱ『でたらめろん』や随筆集『書き捨てた言葉』などから、酒と料理についての文章を収めて、この標題により近いものへと編集しなおしたものである」と書かれている。

3 文学全集における収録状況および論評

①『現代日本文学全集』九六（昭和三十三年五月刊、筑摩書房）

本書は『現代文芸評論集』（三）として、辰野隆・片山敏彦・渡辺一夫・市原豊太・河盛好蔵・中島健蔵・神西清・桑原武夫・生島遼一・寺田透・中村真一郎・加藤周一・本多顕彰・深瀬基寛・中野好夫・西村孝次・吉田健一・竹山道雄・手塚富雄・阿部六郎・高橋義孝・林達夫・山室静・竹内好の二十四人が収録されている。各人の評論が一編から五編の範囲で収められている。吉田健一の場合は、「日本で文学が占めている位置」「日本文学とヨーロッパ」「小説という観念」の三編であり、すべて『東西文学論』（昭和三十年刊、新潮社）から取られている。「或る田舎町の魅力」は入っていないにもかかわらず本書をここに取り上げたのは、荒正人による解説の中で、この作品への次のような言及が見られるからである。

この人は、独特なエッセイストとしても、すでに多くの仕事をしているが、『日本について』（昭和三十二年講談社刊）に収められた「或る田舎町の魅力」など、他人の追隨を許さぬ独特の味をもった文章である。そのなかの勝手な部分を抜いて見る。「下を覗くと、家に挟まれた広い横町で、誰も通らなかつた。広い場所に人間が少くて、始めて文化と呼ぶに足るものが生れる。それはどうでもいいと

して、かういふ児玉のやうな町に來ると、やつと時計がカチカチ言ふのが氣にならなくなつて、つまり、一人でゆつくり酒も飲める。」

本書に収めていない作品である「或る田舎町の魅力」について、原文の一部を引用しながら言及しているのは、この作品がいかに印象深いものであったかということを示しているよう。

②『新選現代日本文学全集』三七（昭和三十五年四月刊、筑摩書房）

本書は、『山本健吉・中村光夫・吉田健一・中村真一郎集』である。吉田健一の収録作品は「シェイクスピア」「或る田舎町の魅力」「森鷗外のドイツ留学」「酒宴」「晩年の牧野伸顕」の五編である。本書に収録された四名に対して、村松剛の山本健吉論、江藤淳の中村光夫論、篠田一士の吉田健一論、丸谷才一の中村真一郎論が巻末に掲載されている。篠田の評論は、後に彼の『吉田健一論』（昭和五十四年四月刊、筑摩書房）に収録された。佐伯彰一は解説の中で、吉田健一について、「氏のエッセイを読むと、ちよつと他に類のない、のびやかな解放感を味わうことが出来る」と述べ、「シェイクスピアを論ずるのも、『或る田舎町の魅力』や『酒宴』について語るのも、氏にとっては、『生き甲斐を感じる』それぞれのやり方という以上の相違はないのである」と書いている。また、本書の月報には河上徹太郎の「食味評論家吉田健一」が掲載されている。

③『日本現代文学全集』九二（昭和三十九年六月刊、講談社）

本書は、『河上徹太郎・亀井勝一郎・中村光夫・山本健吉・吉田健一集』である。吉田健一の収録作品は『日本について』の全編である。伊藤整による作品解説に、次のような部分がある。

この著者における素朴なものの好みは、本集にも少しずつ顔を出してゐるが、中でも埼玉県の児玉といふ田舎町の宿のことを書いたところの「或る田舎町の魅力」といふ短文に顕著であつて、この一文は私の描いた氏の肖像の延長線上にあるものである。

ここでも、伊藤整の解説の中に、「或る田舎町の魅力」が取り上げられていることに注目したい。もっとも彼の場合は、自分自身が吉田健一の児玉行きに関わっていたことを差し引かなければならないかもしれない。なお、本書には瀬沼茂樹による各著者の略伝・紹介記事が併録されているが、そこでは「或る田舎町の魅力」への言及は見られない。

④『現代日本文学大系』六六（昭和四十七年八月刊、筑摩書房）

本書は、『河上徹太郎・吉田健一・山本健吉・江藤淳集』である。吉田健一の収録作品は「シェイクスピア」「日本で文学が占めている位置」「日本文学とヨオロッパ」「森鷗外のドイツ

留学」「或る田舎町の魅力」「アドニスとナスビ」「マッチ売りの少女」「沼」「百鬼の会」「酒宴」「春の野原」の十一編である。①②③と比べて収録作品に短編小説が多いのが本書の特徴である。付録として、本書の著者たちに関するエッセイ（江藤淳の場合は本人のエッセイ）が付いている。吉田健一については篠田一士の「吉田健一氏の周辺」である。

4 アンソロジーへの収録状況

①『現代日本紀行文学全集』東日本編（昭和五十一年八月刊、ほるぷ出版）

本書は、東京・千葉・茨城・栃木・群馬・埼玉・神奈川・静岡・山梨の各県からなり、少ない県で三編、多い県で十編の紀行文が収められている。埼玉には、寺田寅彦の「写生旅行」、吉田健一の「或る田舎町の魅力」、河井醉茗の「妻坂越」が掲載されている。本書には、解説は付いていないが、巻末に「執筆著・発表紙誌一覧」がある。また、ほとんどの各紀行文には、地図が掲げられており、「或る田舎町の魅力」にも「埼玉西部」と書かれた地図が付されている。なお、この地図は初出誌『旅』掲載の地図とは別のものであるので、おそらく、本書掲載に際して新たに書き加えられたものであろう。

②『旅ゆけば物語』（『ちくま文学の森』一三、平成元年二月刊、筑摩書房）

本書は、大和田建樹の「鉄道唱歌」からヴォルテールの「ミクロメガス」（森下辰夫訳）まで、二十二編の旅に関する文学を集めたものである。巻末に池内紀氏による「マルコ・ポーロの夢 解説にかえて」を付すが、ここでは、収録作品への言及は見られない。

③『日本幻想文学集成・一六・吉田健一』（平成四年十二月刊、国書刊行会）

本書は、富士川義之が編者となって、吉田健一の作品の中から「海坊主」「饗宴」「或る田舎町の魅力」「沼」「逃げる話」「邯鄲」「空蟬」「酒の精」「道端」「ホレス・ワルポール」「時間・第一章」の十一編を選んでいる。この作品選択には編者の文学観が反映していると考えられる。「海坊主」や「邯鄲」を幻想文学のアンソロジーに収録することには違和感はないが、「或る田舎町の魅力」や「道端」をも幻想文学として捉えている点については、意外感を伴うからである。ただしこの点に関しては、本書巻末の富士川義之による「酒には精神がある」という解説に、次のような作品理解が示されているのが参考になるろう。

そうした「現在の持続」としての時間のうちに生きることを重要なモチーフとしている諸エッセイ（たとえば「或る田舎町の魅力」「ホレス・ワルポール」「時間」など）も、現実とも幻想ともつかぬ微妙な境域を詩的に喚起させ

ることにおいて並みはずれた手腕を発揮しており、すこぶる印象的である。別な言葉で言えば、「時間は流れる」という認識を推し進めてそれを形象化する過程で生まれた幻想と言ってよいかもしれない。そのとき、或る田舎町も、十八世紀の英国も、現代日本も、雛型の形をととのえてどこか遠くの空間に幻影のようにふわりと浮び上がるのである。

このような作品の捉え方は、後述する種村季弘の解釈とも一脉通じるものである。

二 「或る田舎町の魅力」への論評

1 篠田一士の批評

篠田一士は、吉田健一に対して他の評者に先駆けて早い時期から論評を続けてきた評論家である。彼は、昭和二十九年から昭和五十四年までの評論を『吉田健一論』（筑摩書房）にまとめ、昭和五十六年に上梓している。この中で「或る田舎町の魅力」について論じているのは、全十編からなる「吉田健一人と作品」の「2 Study to be quiet」である。これは原書版『吉田健一全集』（昭和四十三年刊）に掲載された篠田一士の解説を集成したものである。この評論の中で篠田は「或る田舎町の魅力」について次のように述べている。

これはといったものはないにも暗示されていない。ある土地についての紀行文なら、たとえどんなにつまらない土地を扱っても、読者に、そこへ行ってみたいとか、逆にどんなことがあってもそこだけは御免だという気持をかならずかきたてるものだが、この吉田氏のエッセイに限ってそういうことはない。そのためか、はじめてこの文章を読んでもう十年ほどになるけれども、ついぞぼくは児玉なる田舎町の実在を気にしたことはない。まさか吉田氏がつくりだした架空の町だとは思えなかったが、地図をひらいて所在をたしかめたり、一度は是非と、いう気持はもたなかった。いまこの文章を書きながら手近かにある日本地図をひらいてみたところ、確かに児玉という町はある。群馬県よりの埼玉県の町だ。それにしても、依然としてぼくの心は動かない。ぼくの児玉は吉田氏の文章のなかだけで十分である。

ここには、「或る田舎町の魅力」を、文学作品として享受する読者の立場が宣言されている。吉田健一のこの作品は、決して実在の児玉町紹介でもなければ、そこを訪れるための道案内でもない、という理解である。篠田一士によるこのような理解によって、「或る田舎町の魅力」は、文学作品として離陸したといっても過言ではないだろうが、その一方で、初出誌の『旅』や先ほど取り上げた『現代日本紀行文学全集』では、地

図が付されており、読者への実利的な案内となっているのも忘れてはならないだろう。

篠田一士にとっては、児玉が日本のどこに実在しようが、作品としての「ある田舎町の魅力」と、そのことは無関係であると論断すると同時に、作品の主題としては、児玉の町の静けさを吉田健一が書いたところに主眼を見出し、「この静けさは雅びに外ならず、また雅びこそ文明なのである」と述べている。

2 種村季弘の批評

種村季弘は、『書物漫遊記』（昭和五十三年六月刊、筑摩書房）所収の「我が闘争 吉田健一『流れ』」の中で、まず、吉田健一の短編「流れ」について、ここに描かれている場所を地図で探したが見つからず、架空の町であることに気づき、「小説のなかの出来事は小説のなかでしか起こらないからこそ、かけがえない魅力があるのだ。そう気がつけばすむことだった」と述べている。そして、「或る田舎町の魅力」については、この作品を吉田健一の食べ物エッセイと捉えていたようで、次のように述べている。

吉田健一の食べ物エッセイの方はそのすこし前に垂水書房から出ていた『吉田健一著作集』で読んでいた。しかし、私は食通だの酒の味ききだのというものにはさっぱり興味のない性分であるせいか、どんな文章があったのかよ

く覚えていない。それでも一つだけ忘れていないエッセイがある。

『或る田舎町の魅力』というのである。

さらに種村季弘は、この作品の舞台である児玉を訪ねるべく、虎ノ門で毛抜鰯を買い求めて新橋に向かおうとするが、その時急に気が変わり、児玉に行くことを中止したという。児玉の場所を地図で調べ、この作品に描かれている毛抜鰯持参で、吉田健一が二度目に訪れた同じルートで児玉まで行こうとしながらそれを取り止めたのは、「このまま児玉へ行って何とかという地酒を飲んだら、あの文章は私にとって不要になってしまふ。桃源郷は夢見るもので、住んだり行ったりするところではない」という考えからであった。先に引用した「流れ」への作品理解と同様に、「小説のなかの出来事は小説のなかでしか起こらないからこそ、かけがえない魅力があるのだ」と考えたことを示している。

この評論における文学観は、篠田一士の考え方と通じるものがあるが、篠田一士が最初から児玉を訪問することは念頭になかったのに対して、種村季弘の場合は、まさに児玉へ向かうとして準備までの点が異なる。さらに次に取り上げる川村二郎になると、児玉を実際に訪れている。

3 川村二郎の批評

川村二郎の「神話象徴の転位」(初出は「新潮」昭和五十四年十月号、後に『神々の魅惑 旅のレリギオ』所収、平成六年三月刊、小沢書店)は、主として児玉にある金鑽神社や金属文化をめぐる考察が中心となっている評論であるが、児玉訪問の経緯としては、「思い立ったについては、吉田健一氏の『或る田舎町の魅力』という文章の魅力も多分にあずかっている」と書いている。そして、「昭和二十九年から四半世紀も経った現在、そこに書かれているのとそっくり同じ経験を恵まれ得ようなどとは、もちろん予期していなかった。吉田氏のこの小品を読んで、児玉行を一度は思い立ちながら、『桃源郷は夢見るもので、住んだり行ったりするところではない』と思い返した種村季弘(『書物漫遊記』)の賢明さに、敬意を払う気持もたしかにあった」とも述べて、やはり児玉訪問に対するためらいがあったことを率直に書いている。しかし、実際に児玉を訪れることに意義を見出したのは、次のように考えたからであった。

しかし一人のすぐれた文学者がかつて印象深く書きとめた土地は、それだけですでに新たな「歌枕」にひとしい場所であり、強欲な期待にそり立てられさえないなければ、歌枕探訪は、文学を約束事の連環、つまり伝統として眺めることを好む人間に、かりそめの行楽よりは密度の高い満足を与えてくれる。

この記述は、「或る田舎町の魅力」に描かれた児玉を、歌枕と認定した点が何よりも重要であろう。「或る田舎町の魅力」は、昭和二十九年八月に『旅』に発表されて以来、さまざまな全集類やアンソロジーに収録され、文学者たちにも注目されてきたが、ついに「歌枕」となって、児玉という土地が文学史の中に刻印されたのである。ただし、この評論は、製鉄技術に関する興味が中心になっており、そこから金鑽神社訪問も行われているので、吉田健一の作品自体の分析や解釈には力点が置かれていない。

三 「或る田舎町の魅力」における事実と真実

1 「或る田舎町の魅力」における事実発掘の意義

吉田健一には、『ブライツヘッドふたたび』(イーヴリン・ウォー著)という翻訳書(一九六三年五月刊、筑摩書房)があるが、「或る田舎町の魅力」は、吉田健一自身が埼玉県児玉町を再訪したことを書いた紀行文である。イーヴリン・ウォーに倣って言えば「児玉ふたたび」である。二度目に児玉を訪れたのは、この作品が発表された昭和二十九年八月に遠からぬ時期、すなわち、本文中に新緑が「うっとりするほど美しかった」とあるので、四、五月頃と考えられる。

では、彼が最初に児玉を訪れたのは、いつどのようなきっかけ

けによってだったのだろうか。本文には「三年か四年前に」児玉にある高等学校から講演を頼まれたからである、と書かれている。そして、この講演会はそもそも伊藤整が頼まれており、二人で行う予定だったが、伊藤が直前になって出席できなくなったので、当日は吉田健一が一人で講演した、という。作品には、これだけのことしか書かれていないので、この講演会が実施された年月日や、吉田健一の講演内容などについては、本文の中から探索するのは不可能である。したがって、これらのことを追究しても、作品自体の文学性とは関わらないとする考え方もあるかもしれない。けれども、児玉における吉田健一の講演会がいつ行われ、どのような話がそこでなされたかを、もし調査することができれば、その結果いかによっては、「或る田舎町の魅力」という作品世界をより深く理解する一助ともなるのではないだろうか。四百字詰原稿用紙に換算して十二枚ほどの短い作品であるにもかかわらず、吉田健一自身繰り返しこの作品を単行本に収録したり、さまざまな文学全集類やアンソロジーに収録されたり、文学者たちの興味を引いて言及されたりというような現象に鑑みても、児玉という場所の意味を調べることは、重要であろう。

児玉の初訪問と再訪の両方を含めて、この作品の記述内容には、いくつか吉田健一の記憶違いなどもあるようなので、現時点で現地調査を行い、確認できる範囲で記述内容をもう一度確

めておくことは、社会環境の変化が激しい現代において、少なからぬ意義を有するものであると思われる。

2 児玉高校における吉田健一の講演会

児玉高校における講演会は、本文中の記述によれば、「三年か四年前」というのであるから、昭和二十五年か二十六年になるが、これは事実と異なる。吉田健一自身の記憶違いなのか、あるいはわざと不明確に記したのかはよくわからない。実際は、後述する資料の出現によって、昭和二十七年五月三日であることが判明した。つまり、「或る田舎町の魅力」執筆時からほぼ二年前のことである。吉田健一は児玉初訪問の時期を、実際よりも少し古いものとしていたことになる。では、どのような資料によってこの事実が判明したかと言えば、それは、次に掲げる「こだま文学会」の文芸雑誌『反響』第十号（昭和二十七年六月二十日発行）の「編集室」という後記による。「こだま文学会」については、児玉と伊藤整の関わりところで触れることとして、今はまず、この後記の全文を引用したい。なお、この貴重な雑誌は、元群馬県立女子大学教授松本鶴雄氏のご厚意によって拝見させていただいたものである。

十号を発刊できましたことをお互に喜びたいと思ひます。同人誌としては堅実の歩みであり祝福すべきであります。記念の特集として、同人にはもれなく書いて頂く予定

でしたが不可能であつたことは残念でしたけれど、多彩な作品によつて記念特集としました。

本号の発刊より早く五月三日に、記念の講演会を児玉高校文芸部と共催にて開催しましたが大変な盛況でありましたことは同慶の至りであり、御多忙中御都合されてお出で下さつた吉田健一先生に感謝上げると同時に共催を心よくお引受け下さつた児玉高校にも厚く御礼上げたいと存じます。

なほ吉田先生と、郷土の先輩出牛青朗兄より御寄稿頂きました。表紙はまた麓原会の菅野氏の好意によつたものです。重ねて御礼申上げる次第です。これからは編集にも企画をたて、内容の充実を心がけたいと思つてゐます。一増の努力を下さい。

この後記は、『反響』の編集兼発行人峯岸東三郎氏によるものであるが、ここに講演会の月日が明記されているばかりでなく、この講演会が「こだま文学会」と児玉高校の共催であつたこともわかり、貴重な資料である。吉田健一の「或る田舎町の魅力」だけ読むと、この講演会が児玉高校主催のような印象を受けるが、事実はむしろ「こだま文学会」の呼びかけによるものであつた。さらに、後記にもあるように、この雑誌に吉田健一が講演会について寄稿していることも、従来ほとんど知られていなかった。以下にその全文を掲げるが、これを読むと、す

でにこの時点で、後に「或る田舎町の魅力」の主旨となるような感想を抱いていたことがよくわかる。逆に言えば、吉田健一は二年間にわたつてこの時の第一印象を心に持続し、それを確認するために児玉を再訪したとさえ言えよう。なお、この「講演旅行」というエッセイのことは、集英社版『吉田健一著作集』の年譜にも、新潮社版『吉田健一集成』の年譜にも掲載されていない。

講演旅行

吉田健一

多勢の人の前で話をするのは余りいい気持がするものではない。聞いている方が何を考へてゐるのか解らないし話の筋が途中で切れたりするともうおしまひです。併し今度の児玉行きは大変愉快でした。会場での話は型通りに逆上してしまひましたが、その前と後のことを今でも時々思ひ出して、又どこかなるべく遠い所から話をするやうに言つて来てくれないかと心待ちにしたりしてゐます。(尤も言つて来たら今度は忙しくて断る算段をするでせうが)

児玉は何しろ鎌倉から遠いので驚きました。東神奈川から八王子まで何時間かかったか解らず、八王子から児玉までにしても二時間はかゝつたと思ひます。併しこの八高線の二時間は久し振りに旅の気分といふものに眠くなるまで浸らせてくれました。景色がいいし車は空いてゐて、そし

て何時までたつても児玉駅に着きません。よく関西へ旅行に行つて米原を過ぎた頃から京都に着くのは何時だらうな」と考へながら、外の景色にも倦き始めたのを思ひ出ししました。

話が曲がりなりにもすんで、やれやれと言つた気持で会場から町の方に皆さんに案内して戴いて歩いて行つた時のことも忘れられません。

児玉は鎌倉などと比べると何とものどかな感じがする町です。それが何故か、戦前の東京を聯想させて、どこからか豆腐屋の喇叭が聞えて来るのではないかとさへ思ひました。全くのどかな夕方でした。今度は泊り掛けで行きたいものだと思つてゐます。

六百字ほどの分量のごく短いエッセイであるが、「今度の児玉行きは大変愉快でした」とまず「こだま文学会」の人々の厚意を感謝するとともに、児玉まで遠かったことが率直にユーモラスに書かれ、講演会後に散策した児玉の町に魅了されたことが書かれている。そして、最後に「今度は泊り掛けで行きたい」と締めくくっているのが、決してお座なりの挨拶ではなかったことは、「或る田舎町の魅力」が如実に示している。しかも、この「講演旅行」に書かれている、児玉の町ののどかさに戦前の東京を感じ取り、「どこからか豆腐屋の喇叭が聞こえて来るのではないか」と思ったというあたりの記述は、「或る

田舎町の魅力」の、「遠くから豆腐屋が昔通りの節で喇叭を吹いて廻るのが聞こえて来さうで」という部分と照応しており、まさに原型となっているのである。

では、当日の吉田健一の講演会の内容はどのようなものだったのだろうか。この点については、残念ながら先に全文引用した「講演旅行」でも具体的には触れられていないし、「或る田舎町の魅力」にも書かれていない。ただし、幸いなことに当時、この吉田健一の児玉高校における講演を聴いた人々に、直接にまたは書面などによって問い合わせ、おおよその輪郭がわかってきたので、それらを総合して、ここで紹介しておきたい。なお、この取材に関しては、放送大学卒業生の松本彪氏の尽力によるところが大きい。松本彪氏は埼玉県立児玉高等学校の卒業生で、当日、吉田健一の講演を聴講しており、当時の同級生たちにこの講演会のことを書面で問い合わせて下さった。

まず、講演の内容は、ある特定のテーマで一貫した話というよりも、もう少し自由な広がりのある話であり、自分の来し方や生き方について、および翻訳についての話だったようである。この翻訳の話というのは、前記の松本鶴雄氏によればエリザベス・ボウエンに関するものだったと記憶している、のとこのことであつた。吉田健一の年譜を参照すると、確かにこの前後の時期にはエリザベス・ボウエンの『日ざかり』を翻訳したり、それに関連して彼女の文学についての紹介記事なども執筆して

いるので、『日ざかり』の翻訳とボウエンの文学についての話もあった可能性は高い。

当日の吉田健一の外見や雰囲気については、複数の聴衆が同様の印象を受けている。すなわち、「腰が低くソフトな人柄」「茶色っぽいダブルの背広を着て、背の高い人で、姿勢もしゃべり方もフニャフニャしていた」「英国紳士風な大きな体格で歩き方もナヨナヨ」という。これらの印象は、吉田健一の文学的な師匠にあたる河上徹太郎の、「見ると猫背で、手頸などに女のやうなしなを作る青年が、静々とはいって来た」³という第一印象とも重なる。また、当時は吉田健一の父親の吉田茂が総理大臣であったが、講演の中で父親については一言も触れなかった、というのも複数の聴衆の記憶の中に印象深く残っていることであった。

さて、「或る田舎町の魅力」の中で、講演会の「後で御馳走になった料理屋の前が児玉の大通りらしくて、向う側の菓屋には、昔ながらの、二階の屋根と同じ高さ位の中将湯の看板が二階の障子を隠してゐた」とあるが、この懇親会に出席した人の記憶によれば、会場は「二葉」という料亭で行われたこと、その席では「オヤジ（吉田茂）も苦しんでいるのさ」という発言が吉田健一からあったこと、「斗酒を飲む人との前評判通り大盃で豪快な酒の飲み方をする人」で「盛りあがった楽しい想い出として脳裏に残って」いるという。吉田健一は「或る田舎町

の魅力」の中で、「この前に来た時の飲み助としての評判がまだ児玉の町で忘れられずにゐたのだとすれば、酒はなるべく飲んで置くものである」とユーモラスに書いているが、彼の評判は、最初の児玉訪問の時点ですでに児玉の人々に知られていたこともわかる。なお、この料亭「二葉」は、文学講演会の後の懇親会によく使われたようで、伊藤整の講演会の時の懇親会もここで行われたことは、児玉高校卒業生田村清氏から松本彪氏宛の手紙を通して、ご教示いただいた。

3 こだま文学会と『反響』

吉田健一の児玉訪問のそもそものきっかけとなったのは、伊藤整から児玉高校での講演を頼まれたことであった。では、伊藤整と児玉の関わりはどのようなものであり、児玉において文学はどのような展開を示していたのだろうか。そのことは、直接は吉田健一研究と結び付かないように見えるかもしれないが、児玉の文学状況と伊藤整について調べてみると、その関わりを論じるエッセイなどにおいて、吉田健一の「或る田舎町の魅力」に関することが取り上げられることもあり、従来の吉田健一研究では知られていなかったことも、それらの文章の中ではすでに既知のこととされているものもある。したがってこれらの資料を、吉田健一研究の中に摂取する意義は大きいと思われる。

このような観点から重要なのは、すでに言及した松本鶴雄氏の文章であり、福島道治氏である。このお二人は、「こだま文学会」の同人であった。「こだま文学会」の創設の経緯やその同人誌『反響』について、そして「こだま文学会」と文学者たちの交流については、松本鶴雄氏の『「こだま文学会」始末記——ある田舎同人雑誌の現代的意味——』（『文芸埼玉』第3号、昭和四十四年度版、昭和四十五年三月三十一日発行）に詳しい。それによれば『反響』は少なくとも十二冊刊行され、創刊号は昭和二十五年十月である。松本氏の手元に終刊号がないことから、終刊の正確な時期は不明ながら、昭和二十八、九年頃のことである。同人以外の寄稿者について、野田宇太郎や伊藤整らとともに吉田健一の名前も挙げられている。伊藤整と「こだま文学会」の繋がりは、武田麟太郎の弟子であった峯岸東三郎氏が、本庄陸男から紹介されたとのことである。こうして、伊藤整と「こだま文学会」の関わりができ、伊藤整を通して吉田健一の児玉訪問となり、その初訪問で強い印象を得た吉田健一が児玉を再訪して「或る田舎町の魅力」が書かれたのであった。

松本鶴雄氏による、児玉の文学および吉田健一に関する文章として、さらに詳しいのは『さきたまの文人たち』（平成九年十一月刊、さきたま出版会）所収の「峯岸東三郎の『こだま文学会』と高橋秀一郎」である。この文章は、児玉の文学状況を

「こだま文学会」の消長と、児玉が生んだ詩人高橋秀一郎氏によって活写しているものであるが、その中間部を成しているのが、吉田健一の児玉訪問と「或る田舎町の魅力」への言及である。この文章の中で松本鶴雄氏は、先に全文引用した吉田健一の「講演旅行」について、「吉田健一は児玉へ来た最初の印象記『講演旅行』を『反響』十号（昭和二十七年）にも載せていた」として、一部原文も引用しながら紹介している。

さて、児玉とゆかり深い伊藤整であったが、彼の『日本文壇史』資料の根幹となった古書の大半を収集したのは、藤岡市の初心堂店主福島道治氏であり、その福島氏の文章にも、「こだま文学会」と吉田健一のことに触れた箇所があるので、紹介したい。児玉が生んだ詩人高橋秀一郎氏については先述の松本鶴雄氏の文章にその文学的業績が詳しく書かれているが、高橋氏は平成四年に五十五歳で亡くなった。高橋氏の追悼特集に、福島氏が「追想記」と題して文章を寄せている。その中で福島氏は、高橋秀一郎氏が『長帽子』に書いた、昭和二十年代の児玉町の文学状況に触れながら、「こだま文学会」の文芸講演会についても書いておられる。それによれば、まず昭和二十三年一月十七日に、伊藤整と真杉静枝の文芸講演会が児玉高校で開催され、その後も武者小路実篤・林芙美子・亀井勝一郎・野田宇太郎たちの講演会が行われたことが記されているが、その中に吉田健一の名前も見える。なお、福島氏の文章によれば、『反

『響』は第十二号をもって休刊となり、昭和二十九年十月二十六日の伊藤整の講演会が「こだま文学会」の最後の行事だったという。この伊藤整の講演会が児玉高校で行われたことについては、同校の校務日誌にも記載されている旨、埼玉県立児玉高等学校定時制教頭小林松太郎氏より、ご教示いただいた。ただし、同日誌には、昭和二十七年五月三日の吉田健一の講演会のことは記されていない、とのことである。

「こだま文学会」同人だった文芸評論家の山本容朗氏にも、「或る田舎町の魅力」への言及がある。山本氏もこの作品を『旅』発売時に読んだことや、久しぶりに児玉を訪ね、吉田健一が泊まった部屋をみせてもらったりしたことなどを書いている。^③

4 児玉の町並と田島屋旅館

「或る田舎町の魅力」が、どのような背景を持って書かれていたか、その輪郭がほぼ浮かび上がってきたように思う。児玉には武蔵国二一の宮の金鑽神社がある。金鑽神社は『延喜式』（九〇五年）に記載されている古い神社である。平安時代以後は、児玉党の根拠地として知られ、江戸時代には、『群書類従』を編纂した国学者塙保己一が児玉郡保木野村に生まれた。このように児玉は古い歴史と文化を持つ町であり、これらのことについては、吉田健一も「或る田舎町の魅力」の中で触れてい

る。児玉は戦災を受けなかったことから、昭和二十七年に吉田健一が当地を初めて訪れ、その二年後に再訪した時も、「静かな町」であり、「静かでも、一向に寂びれてゐるといふ感じは」せず、「両側に落ち着いたたずまひの家が竝んでゐて、道が広いのが気がいい」と書いている。そして「広い場所に人間が少なくて、始めて文化と呼ぶに足るものが生れる」とも書いている。「或る田舎町の魅力」には直接書かれていなかったが、「こだま文学会」の存在もまた、当時の児玉の文化の象徴であり、その同人たちの文章には、吉田健一の児玉訪問や、他の文献にはほとんど知られていなかった「講演旅行」という短い文章も紹介されていたのだった。

それでは、現在の児玉はどのような町並であり、「或る田舎町の魅力」に書かれている田島旅館や児玉の酒や鎮守の森や薬屋はどうなっているのだろうか。これらのことを実地調査すべく児玉を訪れ、その結果判明したいくつかの事実を述べたい。この実地調査は、松本彪氏の協力によって予想以上の成果を得ることができた。

八高線児玉駅に到着後、最初に訪れたのは埼玉県立児玉高等学校で、ここでは先にお名前を挙げた小林松太郎教頭に校内をご案内いただき、文学講演会が行われた講堂の場所や写真などを拝見した。しかし、当時の講堂の建物は現在はない。また小林教頭との面談から、当時の校務日記には吉田健一の文学講演

会の記録は見えないこと、「或る田舎町の魅力」に出てくる「児玉で作ってゐる千歳簍といふ酒を飲んだ」「蔵元である児玉の町長さん」という記述は、おそらく筑紫本店のことであり、銘柄は「千歳簍」ではなく「千里」が正しいということ、および吉田健一の児玉訪問については『埼玉現代文学事典』にも記載があることなど、貴重なご教示を得ることができた。さらに、伊藤整が講演会で来訪した時に写真を撮影した「スタジオ・タカハシ」をご紹介、ご案内いただいた。この写真館は、詩人高橋秀一郎氏の実家であり、故秀一郎氏の父上と夫人の三千代さんから「こだま文学会」のことなどお話をうかがうことができた。

さて、次に訪れたのは田島旅館で、現在も営業中である。頂戴した名刺の表には、「旅館 田島屋」、裏の地図には、「田島屋旅館」とあった。「或る田舎町の魅力」では「田島旅館」と書かれているが、正式には「田島屋旅館」である。ここで、田島満子さん・康子さん母娘から、吉田健一について詳しいお話をうかがい、旅館内部をご案内いただき、吉田健一が宿泊した部屋も見学できたのは、非常に大きな収穫であった。田島屋旅館は大正三年に建築された木造三階建ての旅館であり、建設当時そのままである。「或る田舎町の魅力」には三階建てということを書かれているが、木造ということは書かれていない^⑦。田島さん母娘のお話から判明した最も大きな驚きは、昭和二十九

年の吉田健一の児玉再訪は、彼単独のものではなく、中村光夫・三島由紀夫・神西清との旅であり、これは中村光夫の渡仏送別会だったという。そして、その時の四名の寄せ書きのコピーを拝見したので、そこに書かれた彼らの言葉を紹介しよう。

金鑽の大前しるき若葉かな

神西清

さきたまの児玉のさとの児玉町田島屋にきてこころいこへり
中村光夫

保己一の家を訪ふとて行きがたき小径を自動車くるまゆく麦の秋
三島由紀夫

喜雀入堂

吉田健一

神西清は金鑽神社を詠んだ俳句、中村光夫は児玉の田島屋旅館の心地よさを詠んだ短歌、三島由紀夫は塙保己一生家を訪ねる途中の景色を詠んだ短歌である。この寄せ書きには、残念ながら日付は書かれていないが、児玉の田島屋旅館でくつろぎ、近くの名所旧跡を訪ねたことが、若葉や麦秋という季節の言葉とともに詠まれ、楽しい情景が目につくようである。この三人が自作の俳句や短歌を書いたのに対して、吉田健一の「喜雀入堂」は、何か漢詩などの一節であろうか。しかし、この言葉も他の三人に劣らず楽しい言葉である。この貴重な寄せ書

きは、すでに『旅』一九九八年三月号別冊付録「ひとりでも泊まれる 路線別 駅から五分の格安旅館」の十五ページに写真で紹介されており、その雑誌も田島満子さんから見せていただいた。雑誌『旅』こそは「或る田舎町の魅力」の初出誌であり、その同じ雑誌に四十年余りを隔てて、この時の寄せ書きが掲載されたことになる。

また、満子さんのお話によれば、これも非常に意外だったのは、「或る田舎町の魅力」の最後に金鑽神社が「その境内は新緑でうつとりする位美しかった」とあるが、実際に神社を訪れたのは中村光夫・三島由紀夫・神西清の三名であり、吉田健一自身は行かなかったということである。当時四歳だった田島康子さんは、この時三島由紀夫に抱っこしてもらったという。「おかみさんの話」として「或る田舎町の魅力」に書かれていることは、田島満子さんが語ったほぼその通りの記述である、とのことである。また、児玉の酒の銘柄が「千歳誉」となっているのは吉田健一の記憶違いであり、正しくは筑紫本店の「千里」であることは、田島満子さんのお話にも出てきた。なお、児玉の町は震災には遇わなかったが、昭和三十年に大火があり、田島屋旅館は幸い被害を受けずに済んだが、この大火によって児玉の町並はそれ以前とすっかり変わってしまったという。吉田健一の児玉再訪が、もしこの大火の後だったら、児玉の町の魅力も減じていたかもしれない。昭和二十九年という再

訪の年は、昔ながらの児玉のたたずまいを実感できる最後の年だったことになる。なお、吉田健一はこの大火を知って、早速火事見舞いを田島屋旅館に書いたという。そして、吉田健一が亡くなるまで、毎年年賀状も届いたという⁽⁸⁾。

以上のような貴重なお話を田島屋旅館で伺った後、「或る田舎町の魅力」に出てくるいくつかの場所を確認すべく町に出た。「料理屋」が「二葉」であることは、先述したようにすでに判明していたが、そこを訪れてみると、建物はもはやなく、駐車場になっていた。また、その「向う側の薬屋」は吉川薬局であるが、さすがに現在は中将湯の看板はなかった。田島屋旅館の三階から眺めた「鎮守の森」は八幡神社のことであり、「城址の濠」とは、雉岡城址のことである。八幡神社を訪ね銀杏の大木を見上げ、雉岡城址にある塙記念館を見学し、さらに、塙保己一一家と金鑽神社へ松本彪氏の案内で訪れ、「或る田舎町の魅力」に描かれている場所の実地調査が完了した。

四 「或る田舎町の魅力」の意義

「或る田舎町の魅力」は、本稿の最初に概観したように、さまざまな全集類やアンソロジーに繰り返し収録されており、また文学者たちの興味を引き付けてきた作品であった。そのような作品としての魅力はどこから生じているのだろうか。それは

もちろん、吉田健一の構成員・表現力に依るのであるが、舞台となっている児玉という土地の歴史や文化の蓄積も大いに預かっていることが、「こだま文学会」の存在などによって浮かび上がってきた。そして、児玉高校卒業生の方々や「こだま文学会」同人からの、貴重な当時の回想、および「こだま文学会」の雑誌『反響』第十号の発掘によって、吉田健一の文学講演会の開催日や当日の講演会・懇親会での様子も明らかになった。また、『反響』第十号に掲載されていた「講演旅行」という短いエッセイの全文を明らかに出来たことによって、児玉への思いが結実したものとして児玉再訪があり、ひいては「或る田舎町の魅力」という、読者の心を引き付けてやまない名作が生み出されたことも判明した。

さらに、児玉の实地調査によって、「或る田舎町の魅力」の記述内容を確認し、誤りを訂正することもでき、当時と現在の違いもわかった。そして、なによりもこの児玉再訪が吉田健一単独のものではなく、神西清・中村光夫・三島由紀夫を伴ったものであったことは興味深い。この顔触れは「鉢の木会」のメンバーであるので、おそらく吉田健一が児玉再訪を思い立ったのは、「鉢の木会」の小旅行として企画したのではないだろうか。「鉢の木会」は、エッセイ「最後のレジスタンス」^⑩によれば、吉田健一・中村光夫・福田恆存・吉川逸治の四名ではじまり、最初は各人の家に集まったというが、その後、三島由紀

夫・神西清・大岡昇平が加わり七名になった。ただし、各家庭に集まっただけでなく、小旅行も行っていたようで、たとえば、吉田健一・中村光夫・福田恆存の三名で「箱根に一泊旅行をしたことがある」という記述や、『現代文学大系』第五十八巻の月報（昭和三十八年十二月）には、昭和二十八年の「鉢の木会」の大島旅行の写真が掲載されている。このようなことから、昭和二十九年の児玉再訪は、中村光夫の渡仏送別会を兼ねた「鉢の木会」の小旅行だったと考えられるのではないだろうか。

けれども、「或る田舎町の魅力」には、「鉢の木会」のメンバーと一緒にいたことは、何も触れられていない。そのことは何を意味しているのだろうか。おそらく「或る田舎町の魅力」という作品は、その題名が示しているように、あくまでも児玉を描くことが中心であり、文学仲間との交友の楽しみを描くことではなかったからであろう。だからと言って吉田健一が、そのような文学的な交友に対して無関心だったのではない。「鉢の木会」のメンバーとの交友は、後に『聲』という文芸季刊誌の創刊に繋がっているし、河上徹太郎との二人旅の楽しさは、「羽越瓶子行」というエッセイに結実しているからである。けれども、「或る田舎町の魅力」の場合は、児玉への初訪問と再訪を通して、静かな落ち着いた町のたたずまいの中に本当の人間らしい生活を見出すというテーマを前面に出し、そのこと

が成功して、この作品が一読忘れ難い名作となったのではないか。「或る田舎町の魅力」は、日常生活を営んでいる場所を離れてある土地に出掛けるという意味で、まさに旅の文学であり、紀行文学のジャンルに入る。だからこそ、アンソロジー『現代日本紀行文学全集』や『旅ゆけば物語』に収録されていたのである。けれども、『日本幻想文学集成』の中に収録されていることからわかるように、この作品は、紀行文学の範疇に入りきれない広がりも持っている。

「或る田舎町の魅力」が文学作品としてすぐれているのは、児玉という特定の町を描きながら、そこに人間の生活の静かで落ち着いた時間を現前させている点である。そのような生活こそ最も大切なことであるというのが吉田健一の考えであろう。名所旧跡めぐりは他の同行者たちに任せて、「一番眺めがよい部屋で」「宿屋のおかみさん」の心尽くしの地元の銘酒をゆっくりと飲んでいた吉田健一は、金鑽神社の境内は新緑でうっとりするほど美しく神鹿が寄って来そうな別天地だが「併しそれは児玉といふ町が別天地であるのとは意味が違ふ」と書く。この何げない結びの言葉は、人間らしい生活を最重視する吉田健一の文明論の表白であろう。

おわりに

人は旅を通してさまざまなことを体験する。旅先で遭遇する出来事が普段の生活とは掛け離れた冒険であったり、悲劇や苦難の連続である場合もある。しかし、旅に出ることによって、普段の生活をより純粹に味わい、思索を深めることもある。吉田健一の「或る田舎町の魅力」は、まさにそのような作品である。児玉への二度の小旅行によって明確になったあるべき生活の時間や、かつてどこにもあつた町のたたずまいは、言葉によって確かな実体を与えられて「或る田舎町の魅力」の中に、実在し続ける。吉田健一が最初に児玉を訪問した昭和二十七年からすでに五十年近く経っている現在、もはや「或る田舎町の魅力」に書かれた世界はわずかしが残っていない。けれども、この作品が書かれたことによって、児玉はある特定の土地という限定を越えて、これを読む読者の心の中で文明のあり方を考えさせる普遍的な存在として、在り続ける。

「ある田舎町の魅力」を吉田健一の文学世界の中で位置付けるならば、やはり旅先での時間の流れを描く長編小説『金沢』に直接受け継がれてゆくことになるが、この作品は『金沢』にとどまらず、評論『ヨオロッパの世紀末』『時間』や、小説『東京の昔』へと、大きく展開してゆくのである。

(平成十一年十一月五日受理)

注

- (1) 拙稿「吉田健一年譜追考」(『放送大学研究年報』第十五号、平成九年)参照。
- (2) 注1の拙稿においても、「講演旅行」については未見であった。
- (3) 『英語青年』昭和二十六年九月号に「エリザベス・ボウエンの『日盛り』について」を発表。また、『新潮』昭和二十七年四月号にも、「世界文学欄 新刊紹介」でボウエンに触れている。その後、昭和二十七年八月には新潮社から『日ざかり』の翻訳を刊行し、『英語青年』昭和二十七年十二月号に「ボウエンの『日ざかり』に就て」を発表している。また、『ユース・コンパニオン』昭和二十九年五月号にも「作家の顔 エリザベス・ボウエン」を寄稿している。
- (4) 『新潮』昭和三十年九月号に掲載されたエッセイ「吉田健一」による。
- (5) 『週刊読書人』(平成九年十一月十四日号)掲載の「懐かしい著作」と思ひ出の文士」および、『新刊ニュース』の「作家点描——あの日、あの作品で」(連載③)。
- (6) 『埼玉現代文学事典』(一九九〇年十一月刊、埼玉県高等学校国語科教育研究会)には、川越雄二氏の執筆により、「昭和二十七年六月号の雑誌『反響』に『講演旅行』と題し児玉町について小文を寄せており、さらに二九年八月号の『旅』誌上にも『或る田舎町の魅力』と題し、同町を紹介している」とあり、ここにすでに『反響』第十号のことが触れられている。また、「田島屋旅館の女将の話によると、実際に神社を訪れたのは三島由紀夫、中村光夫らであり、吉田健一自身は、宿で酒を飲んでいたと云う」という記述もある。この話は本稿でも、田島満子さんから直接伺った話

として記載した。さらに、「連名の色紙」の存在を紹介した上で、三島由紀夫の短歌を掲げ、これは三島の「全集未収録」であると締めくくっている。以上のように、この『埼玉現代文学事典』の「吉田健一」の項目は、児玉との関わりについての貴重な記述資料である。なお、この事典の編集母体である埼玉県高等学校国語科教育研究会の『研究集録』第二〇号(一九八〇年)に掲載されている「国語科教育研究会三十年の歩み」には、昭和三十九年六月十九日に吉田健一が深谷商業高校で「日本近代文学と英文学との関係」という講演会を行ったことが書かれている。

- (7) 本稿の第二章で取り上げた種村季弘の評論では、児玉を訪れなかったと書かれているにもかかわらず、田島屋旅館については、「木造旅館」と記述されている。

- (8) この雑誌には、松本典久氏の執筆により、田島屋旅館の沿革や「或る田舎町の魅力」のことが記されている。

- (9) 吉田健一が、このようになじみの旅館や料亭に毎年賀状を出していたことについては、拙稿「吉田健一の季節」(『大学出版』第二十五号、一九九五年)参照。

- (10) 東京新聞昭和三十年四月十六日夕刊に掲載。後に『三文紳士』に収録された。

- (11) 『新潮』昭和三十一年一月号に掲載のエッセイ「中村光夫」による。これも『三文紳士』に収録されている。

謝辞

本稿執筆にあたりましては、本文中にお名前を掲載させていただきました方々をはじめとして、多くの方々から多大なご協力とご尽力をいただきました。ここに改めて感謝申し上げます。

付記

本研究は、平成十一年度放送大学特別研究費による研究成果の一部である。

The Fact and Truth in the Literature of Travels

— concerning “The Charm of a country town”

written by Yoshida Kenichi —

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

This paper aims to survey the fact and truth in “The charm of a country town” written by Yoshida Kenichi. This essay is a short piece, but placed high value in Yoshida’s works. “The charm of a country town” gives a very good picture of Kodama.

Yoshida Kenichi expresses his criticism in civilization through the charm and calm of Kodama. He visited Kodama town for the lecture meeting, but the date is unknown till now. This paper investigates the date of his lecture by collecting data about the literary society of Kodama.

Yoshida Kenichi revisited to Kodama in the 29th year of Showa. He stayed at “Tajimaya-Ryokan” with his three friends. He was silent on them in his essay “The charm of a country town”.